

## 奄美・琉球の世界自然遺産としての価値の考え方

### 1. 顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)

#### (1) 世界遺産の評価基準 (クライテリア)

世界遺産の評価基準のうち、(ix) 生態系 及び (x) 生物多様性 を満たすものとする。

※ 平成 19 年度に IUCN 専門家モロイ氏の現地視察の結果、クライテリア ix 及び x に該当する旨助言を受ける。

#### (ix) 生態系

かつて大陸の一部として共通の陸生生物が生息・生育していたが、島々が分離・結合を繰り返して、小島嶼群として成立する過程において、多くの進化系統に種分化が生じた。このように大陸島における独特な生物進化の過程を明白に表す生態系の顕著な見本。

#### <奄美・琉球の成立過程>

新第三紀中新生中期 (約 1500 万年前) 以前は、奄美・琉球は大陸と陸続きで共通の陸生生物がいたが、地殻変動による琉球内弧斜面の形成等により、第四紀更新世の初期 (約 200 万年前～170 万年前) までには奄美群島及び沖縄諸島周辺の地域は大陸からの隔離が成立。その後の地殻変動、気候変動に伴う海水準の変動等により、現在の小島嶼群が成立。

#### <高い固有種率>

固有種が多く、特に、陸生爬虫類は 59 種のうち 47 種 (80%)、両生類は 24 種のうち 19 種 (79%) が固有種で、非常に高い固有種の割合を示している。

#### <遺存固有種>

奄美群島及び沖縄諸島は第四紀更新世の初期 (約 200 万年前～170 万年前) までに大陸及び近隣の島嶼群からの隔離が成立しており、その歴史が長いことから、近隣地域に近縁種が分布しない遺存固有種が多数見られる。代表的なものとして、アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、リュウキュウヤマガメ、クロイワトカゲモドキ、ナミエガエルなど。

#### <新固有種>

ハナサキガエル類：奄美群島から台湾までの地域で 5 つの種に分化

クロイワトカゲモドキ：徳之島と沖縄諸島の限られた島嶼のみに分布し、5 亜種に分化

#### <亜熱帯島嶼生態系>

沿岸域を流れる黒潮暖流により湿潤な亜熱帯樹林が成立し、有機物や栄養塩類が河川水系を通じて河口及び沿岸域に達し、マングローブ、干潟、藻場、サンゴ礁が発達。

### (x) 生物多様性

IUCN レッドリストに掲載されている多くの国際的希少種や固有種の生息・生育地であり、また学術上価値の高い、遺存固有種と新固有種の多様な事例が見られ、世界的に見ても生物多様性保全上重要な地域。

例) イリオモテヤマネコ (CR)、アマミノクロウサギ (EN)、ヤンバルクイナ (EN)、ノグチゲラ (CR)、イボイモリ (EN) など。

#### <生物多様性ホットスポット>

Conservation International は生物多様性ホットスポットとして日本列島を選定しているが、特に、絶滅のおそれのある固有種の生息・生育地として奄美・琉球を挙げている。

#### <固有鳥類生息地>

Birdlife International はヤンバルクイナやアマミヤマシギといった固有種の生息にもとづき、奄美・琉球を「固有鳥類生息地」(Endemic Bird Areas of the World) に選定。

## (2) 完全性

多様かつ固有な動植物と、その生息・生育を確保するための十分な亜熱帯林を含み、河川水系を通じて沿岸域の藻場、干潟、サンゴ礁に至る生態系の連続性を有し、上述の顕著で普遍的な価値を構成する要素のすべてを含むとともに、価値を維持するのに十分な範囲が包含されている。

## 2. レスリー・F・モロイ氏 (IUCN 専門家) の評価と指摘事項 (2012 年 10 月来日時)

### (1) クライテリアの適用について

- ・ クライテリア(ix)生態系により説得力のある世界遺産としての価値の証明が可能。
- ・ クライテリア(x)も妥当。クライテリア(ix)ほど説得力は強くはないが、奄美・琉球は陸上生物多様性の保全上及び科学的な重要性を持ち、象徴的種の多くが絶滅の危機にある。
- ・ 類似の世界遺産登録地域や暫定リスト掲載地域、未掲載の亜熱帯島嶼域との比較解析が必要。